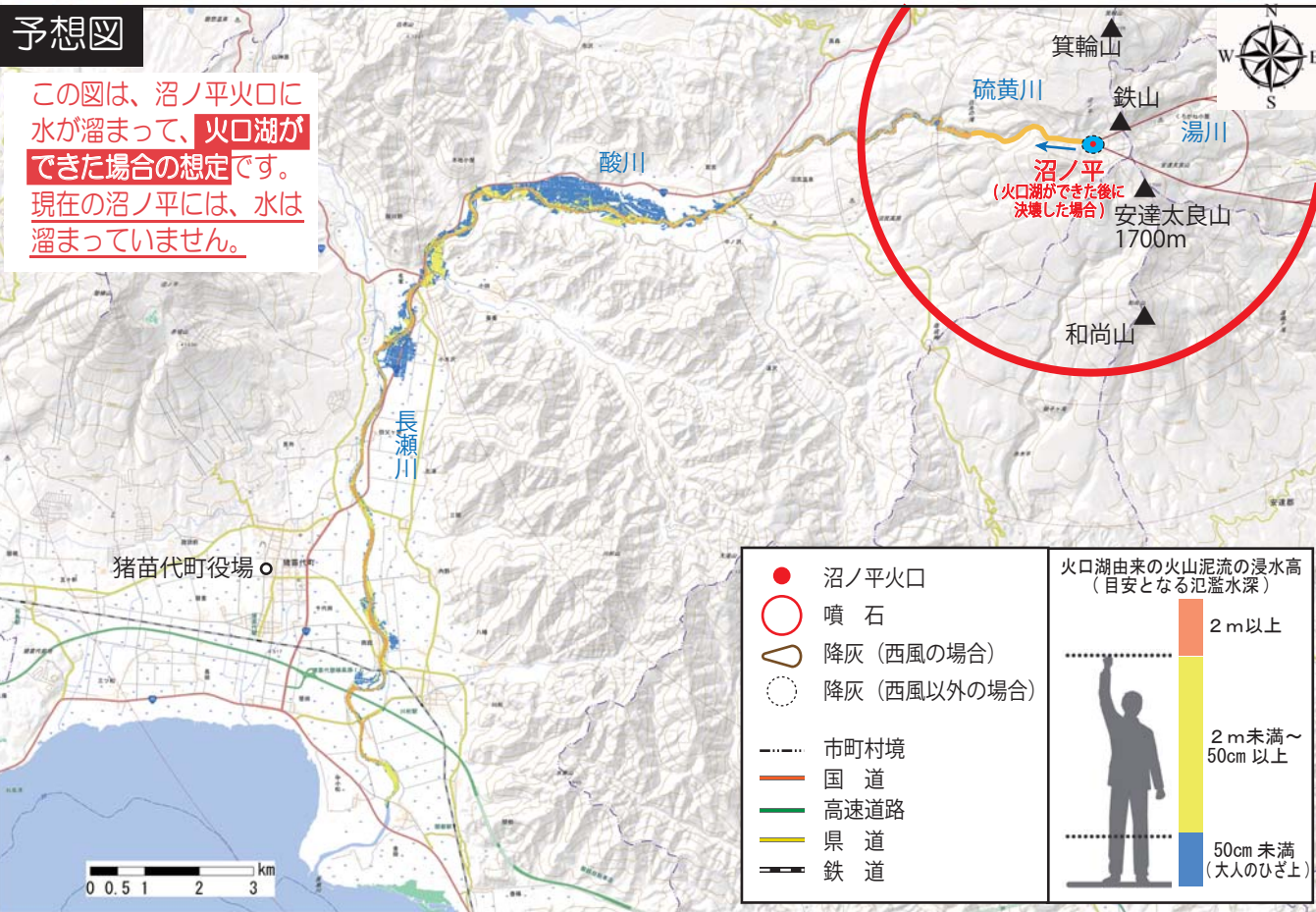


火口湖由来の火山泥流ハザードマップ

沼ノ平に水が溜まって火口湖が出来た場合、火口湖の決壊によって西側の河川に向かって火山泥流が発生することがあります。



火口湖に由来する火山泥流

1900年（明治33年）の噴火のあと昭和初期ころまで、沼ノ平には水が溜まっていた時期があったと記録されています。また、火口内にみられる湖成堆積物や山体西麓の火山泥流堆積物の存在から、より古い時代にも沼ノ平火口に水が溜まって火口湖となっていた時期があることや、おそらくその火口湖に由来した火山泥流が発生したと考えられています（あるいは冬期の噴火時に融雪による火山泥流が発生した可能性も否定はできません）。この沼ノ平に由来する火山泥流は、過去2600年間に7回以上発生しており、硫黄川を流れ下って西麓に堆積しました。沼ノ平に由来する火山泥流のうち最新のものは約850年前に発生したと推定されています。

かつて沼ノ平にあった「湯沼」

1900年（明治33年）の噴火のあとに沼ノ平の火口湖は「湯沼」と呼ばれていました。当時撮影された写真から、かつて存在した湯沼の様子をうかがい知ることができます。



写真1 現在の沼ノ平火口（馬の背から西側に向かって撮影）



写真2 写真3の右奥にある山を背景にして火口底で撮影

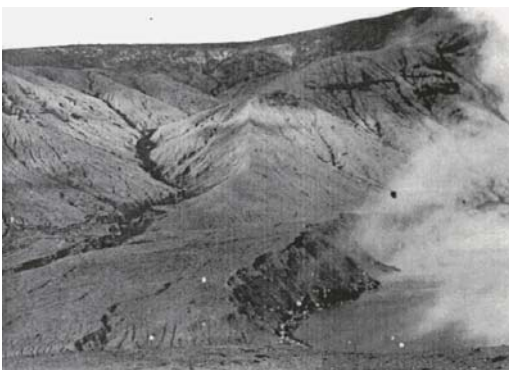
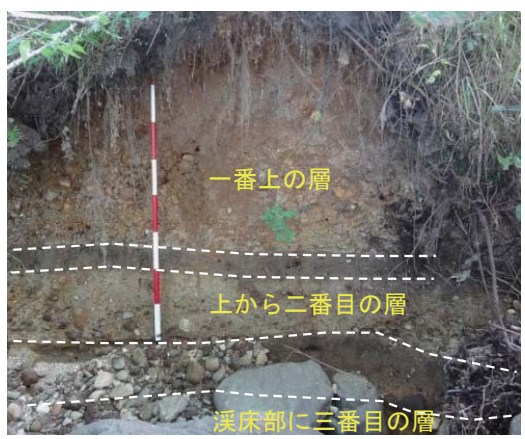


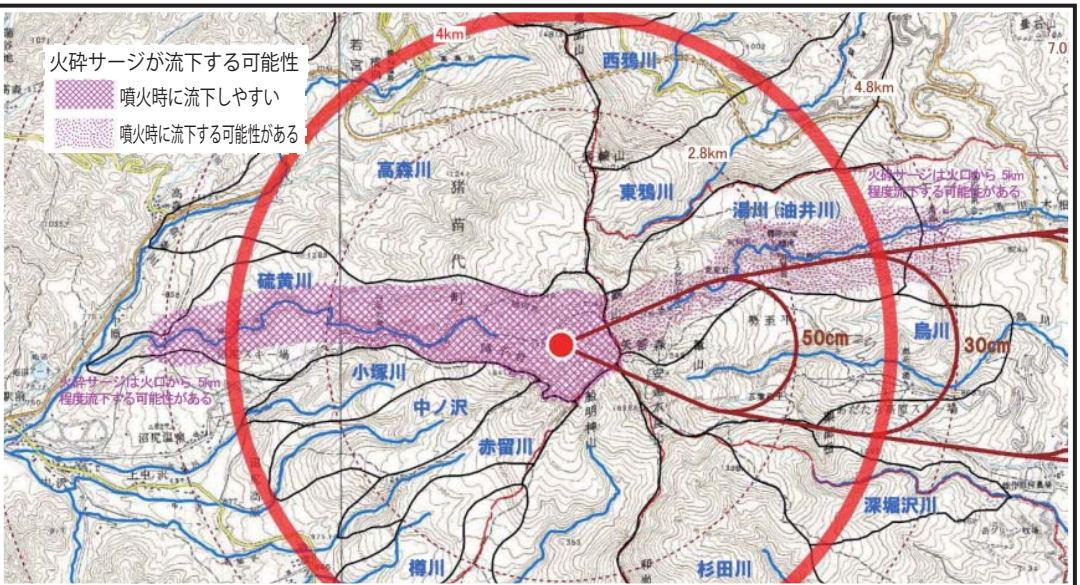
写真3 写真1の → 方向を撮影



安達太良山の西麓に見られる火山泥流堆積物

その他 注意すべき火山現象

火砕流（火砕サージ）



噴火に伴って、火砕流や火砕サージと呼ばれる危険性の高い現象が発生すると考えられます。御嶽山では2014年（平成26年）9月27日の小規模な水蒸気噴火で火砕流が発生し、谷に沿って約3km流れ下りました。1900年（明治33年）に沼ノ平で起きた水蒸気噴火でも火砕サージ（当時の記述は「疾風」）が発生して、これに巻き込まれた避難途中の硫黄鉱山の鉱夫ら72名が犠牲になりました。



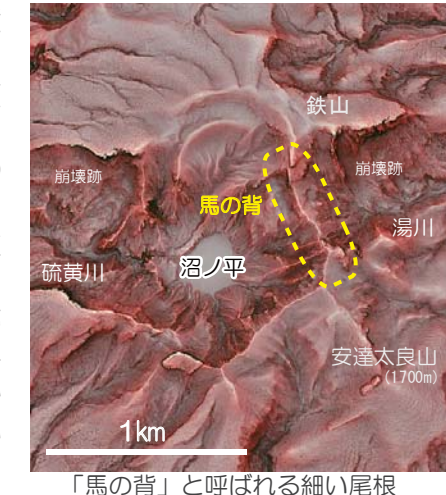
火山ガスや泥水の噴出、地熱活動

沼ノ平では、1996年（平成8年）9月に泥の飛散や泥水の噴出がみられ、その後も2003年（平成15年）頃まで火口内の一部で火山ガスの噴出活動や地熱の異常などの現象がみられました。それ以降は沼ノ平内の火山活動はやや静穏になってきていますが、火山ガスが噴出している場所もあるため、沼ノ平火口底を通る登山道は通行止めになっていて立ち入ることができません。



火口壁や斜面の崩壊

沼ノ平の東側にある火口壁は「馬の背」と呼ばれる細い尾根になっており、内部は変質したもろい岩石であることから、噴火の位置が沼ノ平の少し東側にずれた場合や大きな地震などで崩壊する可能性があります。また、すぐ近くの鉄山の南斜面にも崩壊の跡が多くみられることから、斜面崩壊（および崩壊した土砂の流下）についても注意が必要です。



主な引用文献

藤縄明彦（1980）安達太良火山の地質と岩石、岩鉱、75,385-395。

藤縄明彦・鎌田光春（2005）安達太良火山の最近25万年間における山体形成史とマグマ供給系の変遷、岩鉱、34,35-58。

藤縄明彦・工藤 崇・星住英夫（2006）詳細火山データ集：安達太良火山、日本の火山、産総研地質調査総合センター（https://gbank.gsj.jp/volcano/Act_Vol/adatara/index.html）。

片岡香子・神野成美・長橋良隆・木村勝彦（2015）安達太良山西麓、酸川流域に分布するラハール堆積物：過去14000年間の層序・年代と堆積過程、火山、60-4、461-475。

山元孝広（1998）安達太良山火山西麓の完新世酸川ラハール堆積物、火山、43-2,61-68。

山元孝広・阪口圭一（2000）テフラ層序から見た安達太良火山、最近約25万年間の噴火活動、地質学雑誌、106-12,865-882。